

高齢者による自主グループ活動の実態と特性に関する研究

— 呉地域を事例として —

M070356 森内 康之

1. 問題意識と研究目的

現在、わが国は高齢化という社会変動の中にある。かつて高齢期というのは、短い余生を送る期間というイメージが強かった。しかし、平均寿命が延びるとともに、生活機能がしっかりした元気な高齢者が増加している。一方、次第に長期化していく高齢期をどのように過ごすかが問われている。

そこで、本研究では、高齢者の社会参加の受け皿の一つとして、地域で自主的に行っている高齢者グループ活動に着目することとし、次の3点について検討する。1点目は、高齢者の自主グループ活動における実態と特性を明らかにする。そのため、自主グループ活動へ参加している活動主体にどのような特徴があり、どのように活動しているのかについて検討する。2点目は、地域別及び性別の視点から自主グループ活動の特性について検討する。3点目は、自主グループ活動を促進するための課題について検討する。

2. 調査概要

2-1 調査地域と調査対象

調査地域は、広島県呉市とした。呉市は15万人以上の全国の都市の中で最も高齢化率の高い市であること及び市域の中で高齢化率の異なる陸地部と島嶼部に区分される特徴があり、広島県の縮図と考えられる。

調査対象者は、呉地域の中で同じ趣味あるいは同じ目的を共有するために結成されたグループ会員や呉市で実施された機能訓練を修了した高齢者、また各種教室や講座修了後に自主的にグループを結成している高齢者である。さらに、呉市社会福祉協議会から紹介を受けたグループの会員等である。

2-2 調査期間と調査方法

調査期間は、平成20年10月13日（月）～11月8日（土）とした。調査方法は、自記式質問紙調査法で、郵送調査法とした。調査は2種類とした。調査Aについては自主グループ会員を対象とし、調査Bについては各自主グループのお世話役を対象とした。

2-3 回収結果

調査票Aの回収率は77.7%で有効回答数は398であった。このうち65歳以上の高齢者は363であった。また、調査票Bの回収率は78.9%で有効回答数は97であった。

3. 分析および考察

3-1 自主グループ及び活動主体（会員）の特性

まず、自主グループの特性では、グループを地域

別、登録会員数別、開催頻度別及びグループ発足後年数別に分類したところ、地域別では陸地部に多く、登録会員数別では50名未満のグループが多かった。開催頻度については、月1回開催しているグループが約7割であった。グループ発足後年数では、6年を基準として区分したところ、割合の差は認められなかった。さらに、地域別の視点から分析したところ、登録会員数別では、島嶼部に50名未満のグループが多いことが認められた。また、開催頻度では陸地部において月1回開催が多いことが認められた。

次に、活動主体の特性では、性別においては男性参加者が非常に少ない。しかし、陸地部と島嶼部の比較では、島嶼部に男性参加者が有意に多いことが認められた。年齢別では後期高齢者が多い。参加継続年数では5年以降に急激に少なくなる傾向が認められた。しかし、地域別視点を加えると、島嶼部では5年以上の会員が多い。

3-2 参加形態の特性

まず、活動内容では、閉じこもり予防、介護予防、健康増進目的の順で選択している傾向が認められた。地域別と性別視点を加えた分析では、陸地部の会員は介護予防、島嶼部は閉じこもり予防に関係する活動を選択している傾向がある。特に島嶼部の男性では閉じこもり予防活動を多く選択している傾向が認められた。

次に、活動への参加の「きっかけ」では、約5割の会員が「自分から」活動へ参加していることが認められた。次いで多いのが「知人の勧め」であり、行政職員や家族の勧めは非常に少ないことが認められた。

4. 自主グループ活動を促進するための課題

自主グループ活動を社会参加の受け皿として、また健康づくり・介護予防につながる活動として、さらに促進するために、まず「男性参加者を増やす」、次に自主グループの運営に関しては、「開催頻度を多くする」、さらに、活動内容に関しては、「地域別と性別を考慮した活動内容にする」、最後に、活動への参加の「きっかけ」について、『自分からや知人の勧め以外からの「きっかけ」を増やす』ことが課題である。

5. 本研究の評価と課題

高齢者の自主グループ活動について、地域別視点からの研究には意義があると考えられる。しかし、課題として、さらに対象地域を拡大する必要がある。